

氏名	萩 岡 未 貴
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第228号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉「山田流箏曲の唄～弾き歌いの音楽～」 〈演奏〉縁の綱 峰崎勾当 竹（移曲 萩江節） 長恨歌曲 山田検校

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	准教授	(音楽学部)	吉川 さとみ
(副査)	〃	教授	(〃)	武田 孝史
(〃)	〃	〃	(〃)	塚原 康子
(〃)	〃	准教授	(〃)	味見 純
(〃)	〃	非常勤講師	(〃)	大間 道敬

(論文内容の要旨)

本論文は、山田流箏曲が唄を歌う邦楽ジャンルであり、それが広く認識されること共に、弾き歌いをする邦楽という特質を明確にするべく著す。

「唄」は、山田流箏曲の大きな魅力の一つである。それだけに、流祖作曲の作品を始めとした歌物（歌曲）がたくさんある。参拝道行物・ストーリー性のある物・景色物など、題材にも富み、また特に能楽・河東節など、他邦楽の影響を受けたものも多く存在する。しかし、箏曲というジャンルは、楽器を弾きながらの発声、歌唱をする「弾き歌い」という演奏スタイルが基本である為、この「弾きながら」というのがハンデとなり、どうしても、他の唄を歌う邦楽ジャンルに比べて、唄への意識が薄くなりがちになる。また、大変悲しい事に、箏という楽器を弾くイメージのみで、唄を歌うということを知られていないことさえあるのが現状である。「唄の山田流箏曲」と称されるからには、歌物が多いというだけでなく、演奏家の特色としても、さらなる山田流箏曲の唄をアピール、そして唄を扱うジャンルとしての唄への意識が必要で、見直すべきではないかと考える。

筆者が感じる山田流箏曲の唄の意識の薄さは、「弾き歌い」により、弾くついでに歌うことにより起きる。言葉の不明瞭さや姿勢の悪さ、歌詞の意味の伝わりにくさなどが挙げられる。また歌唱面に於いても、操箏を兼ねるため、行き届きにくいのは確かである。

「唄の山田流」としての自覚を持って、この最大の特徴を大切にしたい。

箏曲の根底であり、特質の「弾き歌い」にまず焦点を当てる。「弾き歌い」とは弾いて歌う、ただそれだけのことではない。この箏曲にとって、当然の演奏スタイルが、山田流歌曲の魅力を増大させ、特質である。筆者は、博士リサイタルにて、独奏独唱・唄別・二面一挺という三つの演奏スタイルを用いて比較し、弾き歌いの難易点と必須性について研究した。その上で、唄のジャンルとして広く山田流箏曲が認識される為、歌唱の意識を見直すのである。

また、今までたくさんの著書、音源の解説、事典、雑誌など、山田流箏曲について書かれたものがあるが、歴史的事実やルーツに基づき、或いは音楽理論的に、執筆されている。筆者は、もっと熱く、舞台の上で演奏をする者が、実際に体で何を感じ、体の中で何が起きていて、何を考えているのかという点は、演奏する者にしか書き得ず、演奏者の視点の部分こそ、山田流箏曲の本質が見え、これから残し

ていくべきではないかと感得する。

二面一挺のタテでは、器楽的な面での曲の進行と緩急を司りながら、歌唱するということであり、重大な役目を同時に行う。その為、器楽的な面の質と歌唱の質を同じ意識レベルで気を配ることは非常に難しく、弾くついでに歌うという状況が生まれる。これにより、音程を守ることで歌唱の役目が達成されがちで、歌唱力としては、伝わりにくい傾向にある。しかし、箏曲や山田流歌曲は弾き歌いにより成り立つ様、むしろ弾き歌いをする音楽として構成されており、弾き歌いという演奏形式が箏曲にとって必須であることは楽曲からも分かる。

唄別のスタイルでは、弾き歌いにより、歌唱の面でおろそかな点に気づく。箏曲は、分業するジャンルに比べると、比較的楽譜の拍を守ろうとしながら歌うが、本来唄ありきの音楽とはもっと自由なものであり、曲の雰囲気重視の上で、意思疎通さえとることができれば、それが最良なものである。これは、やはり分業故の専門化の賜物であり、唄ありきとはと見直すべき点である。一番楽に唄によって弾くことが可能な邦楽であるはずなのに、唄次第という演奏の感覚が念頭にあるわけではない。その点は、操箏に注意の割合が多くいき、少し横に置いてきてしまったのではないかと考える。

また一方で山田流には、他邦楽ジャンルの影響を受けた歌物がたくさんある。やはり雰囲気を歌い分けることが大事である。取り入れられている要素を知ることやその要素が曲のどのような場面に反映されているのかを作品としてとらえ、言葉で書き表しづらいことは語り継がれながら、山田流の演奏家が歌い継いでいくことが何より重要と筆者は考える。

筆者の考えでは、独創性を出す手段として有効な生み字を使う際にも、弾き歌いの難易点に気づく。フレーズを弾く動作に於いては、自分の方へと向かって弾くのに対して、弧を描く声の向きは、口から出た後、向こう側へと着地するという互いに逆のことをしている為、一人で両方行うことに感覚的に無理が生じ、難易点となる。その点、唄別で分業であれば、客観的に聞こえてくる旋律にのって、歌うことができるわけで、歌に専念して、挑むことが可能である。

確かに箏曲は弾き歌いにより、表現力・歌唱力の面でハンデがあるが、弾き歌いでの難易点を挙げて、弾き歌いと付き合い方を研究し、そこをぎりぎりに挑戦し、攻めて行くことで、思い描く歌唱に近づけるのではないかと考察する。時として、ハンデは強みに逆転する。弾き歌いによって、自由が利かない、動作と声の向きの矛盾と不自由点はあるが、無理ぎりぎりのところに気持ちで攻めていくことで歌唱は伝わるのではないかと感じる。唄で曲を進行させていくが、その唄は気持ちで動かすもので、作品に対する思いだけである。弾き歌いをしようとも、表現しようという根本的な技は持ち続け、曲の意図を推測して、近づくように試行することは、表現力向上につながり、伝わる歌唱に結び付くはずである。「唄の山田流箏曲」という特徴を実のあるものとして、後世まで存続させるには今が大事であり、山田流の演奏家一人ひとりが、弾き歌いをする唄の邦楽ジャンルであることに自覚を持って、表現者であることを絶対に忘れてはならない。

(総合審査結果の要旨)

申請者は、山田流箏曲の大きな魅力である唄に着目し、「弾き歌いをする音楽」としての山田流箏曲のあり方を模索すべく、4回にわたるリサイタルでは曲趣やスタイルの異なる歌の味わいを聴かせる演奏を行った。どの曲にも唄の深さ、感情、色彩が感じられ、最後まで集中力を切らすことがなかった。特に最後の《長恨歌曲》はタテとして歌いながら、全体をまとめる大きさが感じられた。

論文は、山田流箏曲の弾き歌いの音楽としての特質を明らかにしたものである。山田流箏曲の伝統的な弾き歌いや、近年生まれた唄別という方式の特性に着眼し、表現の改善方法の提示を試みた点は、着眼がユニークであり、意欲的である。本研究は、まず、序章において、研究の目的と意義を明らかにした上で、1章において、山田流箏曲の歴史を、弾き歌いの観点から整理している。続いて、2、3章に

において、筆者の演奏者としての経験に基づきながら、弾き歌いをめぐる課題が挙げられる。最後に、結論において、演奏時の心構えについて触れている。この中でも、歌唱方式によって生ずる操箏や歌唱に関わる身体感覚の違いを具体的に指摘している2章には、読み応えがある。

ただし、論文構成上のバランスと緊密さに欠ける面は否めない。研究目的の重点が、山田流箏曲の楽曲が「弾き歌いの音楽」であることを主張することと、山田流箏曲の表現の改善方法の提示のどちらにあるのか、また、研究対象は山田流箏曲の楽曲なのか、山田流箏曲演奏家の意識なのか、明瞭ではない。そのため、研究結果は、演奏者の精神論で締めくくられてしまっているような印象を受ける。

とは言え、申請者が、演奏プログラムでの実体験に基づきながら、論文において山田流箏曲の特質を丹念に整理し、表現の改善方法の提示を試みた意欲を踏まえれば、その学術的意義は十分認められ、本研究科の趣旨にも適っている。博士の学位にふさわしい成果と認め、合格と判断される。